# 垂水人形

## ～素朴な土人形・鹿児島県伝統的工芸品～

垂水島津家の「八百姫（やおひめ）人形」

文禄・慶長の役（西暦 1592 ～ 1598）の時に、島津義弘が伴い帰った陶工たちが土人形を製作したのが、垂水人形のおこりと言われています。
垂水島津家でも職人を招き、娘、花嫁、福神、犬、猫、鯛などの人形が作られました。やがて垂水人形は冬場農家の副業になり、大正の初め頃は 20 軒の製作者があり、1 年に 800 個も作られたそうです。大隅半島から志布志方面まで販路も拡大し、隆盛を極めていました。しかし、昭和 10 年（西暦 1935）頃からすたれ、戦後一時途絶えました。垂水人形は素焼きの土人形で、こねた粘土を型わくに入れて型を作り、乾燥させたものを素焼きにして、胡粉を塗り、その上に色づけした素朴なものです。
大きさは 12 ～ 60 ㎝、3、5 月の節句に飾られ、昔から厄時災難を除き、出世開運、子どもの健やかな成長、幸運を祈願する意味を持っていました。戦後から途絶えていましたが、帖佐人形や残っている垂水人形の原型を参考に平成元年（西暦 1989）に復活しました。なお、垂水人形は鹿児島県の伝統的工芸品に指定されています。

# 民話・伝説

## ～「江之島弁財天」「河童と尻無みな」～

### ⑩「江之島弁財天」

悪人の鱶九郎は手下十数人と共に現れ、人さらいをするので人々から恐れられていました。今度も十二人の娘を捕まえて敷根（現霧島市）辺りから舟を出しました。おぼろ月の静かな夜にギッチラギッチラと櫓を漕いでいましたが、桜島と早崎の間の※瀬戸海峡を通り抜ける頃、急に霧が立ち始め一寸先も見えなくなりました。海峡は流れが早く溶岩や浅瀬も多くとても危険な所です。舟は流され鱶九郎たちは慌てふためいていました。

その時、たいそう美しい娘が立ち上がり「私の言う通りに舟を進めて下さい。きっと助かります。」と気品のある声で言います。従わなければならないような不思議な力があります。鱶九郎はこんな美しい娘が混じっていたのかと思いつつ「この弁天様の言うとおりにせよ。」と命じます。手下たちは娘の言うとおり一生懸命、舟を進めます。

流れに巻き込まれながらもそのうち櫓も軽くなり、どうやら危険を脱したようです。やがて小島が近づいてきて「この島に舟をつけて一休みしましょう。そのうち霧も晴れてきましょう。」と娘が言い、ザ・ザ・ザーッと舟底が砂浜にめり込み、舟は止まりました。心配そうな女たちに娘は「ここは弁天島です。この島の神様がきっと皆さんを助けて下さいます。信じて下さい。私は様子を見て来ます。」と言って浜へ降り、少し弁財天（べんざいてん）を祀る神社に登って行きました。小さな島で逃げられまいと鱶九郎は娘を追いませんでした。

手下たちも女たちも疲れ果て、眠り込んでしまいました。やがて霧も晴れ、東の空が白んできて鶏も一しきり鳴き出すころ四・五艘の舟が矢のように近づいてきます。弓矢をかざした役人が舳先に立っています。

慌てて鱶九郎たちや手下たちは逃げようとしましたがあっという間に一人残らず捕らわれてしまいました。

女たちは全員保護されましたがあの娘が帰ってきません。役人達は島中を捜しましたがどこにも姿がありません。

そのうち弁財天の小さなお堂の中に像を見つけ、女たちは口々に「あの方のお顔にそっくりです。弁天様が救ってくださったのです。」と合掌し、深々と頭をさげたのでした。

鱶九郎が“弁天様”と思わず言った美しい娘は本物の弁天様だったのです。

※大正３年桜島大爆発で大隅半島と陸続きになるまでは「瀬戸海峡」がありました。

### ⑪「河童と尻無みな」

新城麓の馬形川上流の青々とした滝壺に、神通力を使う、悪賢い河童が住んでいて、人や家畜に被害を与えるので、村人から恐れられていました。ある日、近くの薬師観音寺の妻女が川べりで野ビルをつんでいると、一人の老人が声をかけてきました。門徒だと思い、挨拶を交わしましたが老人は後ろから妻女を押して川へ落としてしまい、妻女は死んでしまいました。河童の仕業と思ったお寺の住職は、非常に怒って何とか懲らしめてやろうと滝壺の岩壁に大日如来を表す梵字「バーン」を刻み込み、その威力で河童を呪縛し、封じ込めようと考えました。岩壁は滝のすぐ横にあるので上から吊るしたブランコのようにして腰かけた状態で一心不乱にのみをふるいました。

「此の滝や河中に住む河童よ、此の字が輝く限り、今後一切此所に住むべからず、人畜に加害をする事能わず、ここに厳しく河童を封ず。喝！」住職は河童に届けとばかり大声で叫びました。それでも河童は夜な夜なあらわれてはこの梵字を爪でひっかいて消そうとしますがコケや土が剥がれてますます光り輝きます。

河童はとうとう観念し、被害はなくなりました。

この馬形川には今でも他では見かけない不思議な貝が生息しています。しまかのこばい（アカマイ科）と言い、巻貝の一種です。どの貝も小さな穴があいていて「河童は人の尻をぬくと言うがそれができなくなった腹いせに貝に穴を空けるのだ。」と村一番の物識りが教えたそうです。岡山県久米郡市岡村誕生寺の境内を流れる片目川の片目魚の伝説もこれとよく似ています。

※垂水にはたくさんの民話や伝説が残されています。民話・伝説垂城奇話は 300 円で販売しています。

# 近世垂水の偉人

## ～和田英作と瀬戸口藤吉～

日本洋画壇の巨匠，**和田英作**

和田英作は、明治７年（西暦 1874）、垂水市田神に父秀豊、母トヨの長男として生まれました。

４歳の時に故郷を離れ、同 20 年、東京の明治学院予科Ｂ組に入学した後に、上杉熊松、曾山幸彦、黒田清輝といった名立たる画家から手ほどきを受けました。白馬会の結成にも尽力し、会員となっています。また、東京美術学校西洋画科開設に伴い、助教授にも任ぜられ、文部省留学生としてパリへ留学し、「思郷」がサロンに入選しました。国内外から数々の勲章を授与され、文展審査委員、東京美術学校校長等にも任ぜられ、公的な場では帝国劇場の天井画と壁画、東京駅中央停車場の壁画、皇居内の生物学御研究所の「薔薇」等を描いています。

昭和 15 年（西暦 1940）には、法隆寺金堂の壁画の模写を始め、昭和 24 年（西暦 1949）１月 26 日に法隆寺が焼失した際にこの模写が大変役に立ったとされています。因みにこの日の教訓を活かそうと毎年１月 26 日は「文化財防火デー」として、全国を挙げて文化財に対する防火の意識を高める消防訓練などが行われています。

昭和 18 年（西暦 1943）には湯川秀樹博士らとともに文化勲章を受章し、晩年は静岡県清水市（現静岡市）の三保松原にアトリエを設け、富士山を描きつつ、『渡頭の夕暮』『思郷』その他数多くの名画を残しました。黒田清輝、藤島武二とともに日本洋画壇の三先達と言われ、わかりやすく優しい具象画を得意とした和田英作は昭和 34 年（西暦 1959）１月３日 84 歳で死去、東京多摩霊園に静かに眠っています。

「和田英作」

「渡頭の夕暮」

「赤い燐寸」

⑫「和田英作使用の画室」

行進曲の父，**瀬戸口藤吉**

「瀬戸口藤吉」

「瀬戸口藤吉翁記念行進曲コンクール」

「瀬戸口藤吉翁を偲ぶ演奏会」

⑬「顕彰碑」

瀬戸口藤吉は、明治元年、垂水市田神に瀬戸口覚兵衛の次男として生まれ、薩摩藩の役人だった父の弟、大山軍八の養子となり、神奈川県横須賀の海軍軍楽隊に入隊します。

鳥山啓作詞の「軍艦の歌」で初めて作曲し、同曲を吹奏楽による行進曲に編曲した『軍艦行進曲』を観艦式で初演奏して、国民の心と魂に大きな感動を与えました。その後、大山軍八との養子縁組を解消し、再び瀬戸口姓へ戻り、海兵団付楽長として軍艦八雲、三笠、敷島、出雲に乗艦。アメリカ殖民 300 年記念万国陸海軍式典には楽長として派遣され、米国、ヨーロッパ各国を訪問、その際に聴いた交響管弦楽団の演奏に感動して、管弦楽の必要性を強く感じ、その結成に力を尽くします。

日比谷公会堂で管弦楽団による演奏会を開催。「軍艦行進曲」を管弦楽団用に編曲した『軍艦マーチ』を演奏し、観衆に大きな感動を与えました。明治天皇御大葬儀をはじめ、昭憲皇太后御大葬儀、大正天皇御即位大禮において指揮しました。

50 歳で海軍軍楽特務少尉定年退官し、同年帝国劇場で退官記念の告別演奏会が華々しく開催されました。退官後も東京帝国大学音楽部をはじめ多くの大学で指導する一方で各地に数多くの少年鼓笛隊を設立、指導しました。70 歳で内務省情報部選定詩『愛国行進曲』の作曲に応募当選して、レコードは百万枚売り上げを記録しました。大日本音楽協会より内閣総理大臣賞を受賞し、日比谷公会堂で軍艦行進曲 40 周年記念演奏会が開催されました。

昭和 16 年（西暦 1941）脳溢血のため永眠、神奈川県横須賀の常光寺で葬儀が営まれました。享年 74 歳。

※歌詞のあるものが「軍艦の歌」、歌詞のないものが「軍艦行進曲」、「軍艦行進曲」を管弦楽団用に編曲したものを『軍艦マーチ』と言います。軍艦マーチは世界三大マーチの一つに数えらえています。